



仏教婦人会

綱領と歩む



仏教婦人会総連盟講師

天岸浄圓



仏教婦人会綱領



わたくし しん らん しょうにん おし みちび
私たちは 親鸞聖人のみ教えに導かれて

ひと しあわ ねが
すべての人びとの幸せを願われる

あ み だ にょらい ごころ
阿弥陀如来のお心をいただき

じ た
自他ともに

ごころゆた い しゃ かい
心豊かに生きることのできる社会をめざし

あゆ すす
ともに歩みを進めます

ちようもん たい せつ
一、お聴聞を大切にいたします

な も あ み だ ぶつ わ
一、「南無阿弥陀仏」の輪をひろげます

ほとけ ねが い かた
一、み仏の願いにかなう生き方をめざします

2018年2月制定(改定)・2018年4月公表

はじめに

「綱領と歩む」ということは、綱領を学び生活の中に活かしてゆくことです。

綱領は様々な研修会で唱和されるものの、形式化して綱領から学ぶことも、活かすことも希薄になっている背景があります。そこで私たちの一つの指針となり、学びになればと願って、「綱領と歩む」を仏教婦人会総連盟講師の天岸浄圓先生にご執筆いただきました。

私たちは 親鸞聖人のみ教えに導かれて
すべての人びとの幸せを願われる
阿弥陀如来のお心をいただき
自他ともに
心豊かに生きることのできる社会をめざし
ともに歩みを進めます

親鸞聖人は私たち一人ひとりが真実の依りどころをもって、
かけがえのない人生を正しく豊かに歩む道を開いてくださり、
その道を浄土真宗と名づけられました。その依りどころこそ、
すべての人びとの幸せを願われた、阿弥陀如来のご本願・念
仏往生の誓願でした。その根本精神は、あらゆる人びとを別
けへだてなく救う大いなる慈悲の一言におさまります。

「慈」とは、見返りを求めず他の人びとの幸せを願い、実現
しようとする行動です。また、それによって相手が幸せに恵
まれ、安らかであることが、自らの何よりの幸せと受けとめ
る生き方です。「悲」とは悲痛の共感を意味します。まず、
他者を悲しませないことです。さらに他が悲しみ、苦しみ、
悩む時には、その苦悩を自らが担って取り除こうとする生き
方です。

このような生き方こそ、いのちを恵まれた者にとって最も尊い生き方であると教えられるのがご本願の精神です。この本願のお心をお聞きし、その実現を志す者を仏教徒といい、浄土真宗の門信徒といいます。

しかし、このお慈悲をお聞きして、尊重して生きようとするとき、あらためて自分中心に物事を判断し、自己の利害のみに左右されている現実に気づかされます。そればかりでなく他が自分よりも豊かならば、劣等感にさいなまれ恨みや妬みを生じます。逆に、自分が他より優れていると思えば、優越感に浸って他を軽んずる浅ましさが知らされます。この生き方には傲慢と不安は生まれても、安らぎと幸せはおとずれません。

この気づきが、凡夫という深い反省の意識を与えてくださいます。この自覚こそが、自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献するスタートラインとなるのです。

現代の社会状況は、この大慈悲と真反対にどこまでも自我を主張し、大きな格差を生む方向へまっしぐらに進んでいるように思われます。その先にはどんな社会がまっているでしょうか。

一、お聴聞を大切にいたします

浄土真宗は何よりもお聴聞を大切にしてきました。その伝統の中で私たちもお育てをいただき、当然のように真宗門徒と言ってきました。けれども私たち一人ひとりに真宗門徒であるとの深い自覚があるのでしょうか。ただ言葉だけではありませんか。聞かせていただいたみ教えが真の依りどころとなり、自身の生き方につながっていなければただ知識だけといわねばなりません。

なぜ阿弥陀如来を尊いお方と敬い、拝むのかという基本的な疑問に答えられますか。基本からのお聴聞が何より大切です。

お聴聞は単に仏教用語を憶えることではありません。どのように生きることが本当に正しいかを自身の上に確立してゆくためのものです。

一、「南無阿弥陀仏」の輪をひろげます

何よりも自分が南無阿弥陀仏とお念仏を称える身となっていますか。そこから見直しましょう。

「お念仏の声が聞かれなくなった」と耳にするようになって久しいです。それはお念仏をすすめられても、言葉として聞くだけで実際に称えようとしなないからではありませんか。声に出して称えようとする意識がなければ、いつまでたっても称えられません。そのうちいつかと思っていたら、いつになっても「いつか」はおとずれません。

お念仏は阿弥陀如来が私たち一人ひとりにとどいて、私をよび覚ましてくださる大切なご説法であります。そのお念仏によび覚まされてこそ、仏さまを忘れがちな私が仏法に目覚めさせていただけるのです。

また、南無阿弥陀仏を通して、ともに仏法に育てられる者としての「輪」を確認し、御同行、御同朋の「輪」をひろげ、次世代に伝えてゆく努力を惜しんではなりません。

一、み仏の願いにかなう生き方をめざします

仏さまのみ教えをお聴聞するとき、自分の浅ましさが知られます。その自覚を親鸞聖人は「凡夫」とあらわされました。ですから凡夫とは、仕方がないという言葉ではありません。はずかしいという意識に根差したお言葉です。はずかしい状況は気がつくまではわかりません。でも、気がつけば必ずはずかしくしないと工夫し努力します。決してそのままにはしておかないでしょう。

浄土真宗は他力の教えといますが、他力とは努力しないという意味ではありません。教えに背を向けて生きようとする自分が、仏さまを中心に生きようと努め意識するところに、仏さまの救いを実感する言葉です。

そこから、少しでも仏さまのみ教えをお聞きし、そのお心にかなった生き方という目標が生まれます。すぐに完全には無理ですが、仏さまをめざして、少しずつ、少しずつですが、育てられてゆくことが仏法に遇うということであり、また、遇わせていただいた者の責務であります。

このような心をもって、一人ひとりが仏教婦人として、声をかけ合い、ともに力を合わせて、さまざまな困難で大きな課題に対してゆくところに、心豊かに生きることのできる社会の実現を望むことができます。

仏教婦人会総連盟